

ご存知ですか？

予約・リクエストサービス

○予約・リクエストサービスって？

篠崎図書館に現在ない資料でも、区内の図書館にあるものは、篠崎図書館に取り寄せて借りることができます。

また、区内にない本や雑誌のバックナンバーも、リクエストカードに記入して頂ければ、購入を検討したり、都内の他の区市町村の図書館や都立、国会図書館から相互貸借によって借用し、ご提供することもできます。お読みになりたい本が区内になくても、どうぞ諦めず、カウンターにぜひお問い合わせ下さい。

予約は館内の検索機(OPAC)や、インターネット上のホームページ(※)からご自分ですることができます。

お調べ頂き、区内に所蔵がない本や雑誌でしたら、カウンターでリクエスト用紙をお渡します。

申し訳ありませんが、リクエスト頂いた資料でも、収書方針などを検討した結果、ご希望に沿えない場合もございます。また、視聴覚資料のリクエストは受付けておりません。予めご了承下さい。

※江戸川区立図書館ホームページ

<https://www.library.city.edogawa.tokyo.jp/>

江戸川区立図書館ホームページモード版

https://www.library.city.edogawa.tokyo.jp/www/index_imode.html



○予約・リクエストサービスの注意点

予約・リクエストできる数は貸出できる数と同じです。予約した資料がたくさん届いてしまっても、本であれば10冊を超えて貸出することはできませんので、ご自身で冊数と日付(貸出期間、取置期限)の管理をお願い致します。

上下巻などのシリーズものは同時に予約されても下巻が先に届いてしまうことがあります。上下巻が揃うまで取り置きはできません。あしからずご了承頂き、調整をお願いいたします。

取り置き期間は、図書館から連絡を差し上げた翌日から7日間です。(館内整理日など休館日は除く)連絡不要の方も、確保された翌日から7日間です。ご家族への伝言や留守番電話への吹き込みもご本人に連絡できた場合と同様です。電話がつながらない時は取り置き期限の間、連絡を致しますがそれでも連絡がつかない場合はキャンセルさせて頂きます。なるべくご本人に直接ご連絡のつく番号をご登録下さい。メールでの連絡をご希望の方は、ホームページからご登録ができますのでご利用下さい。

予約に関してご不明な点がございましたら、カウンターにお尋ね下さい。



人物ブックマーク

第二葉 真田 幸村

今回紹介するのは、今も昔も根強い人気を誇る真田幸村。幸村は真田昌幸の二男として生まれ、幼名は弁、元服後は信繁を名乗る。「幸村」という名は後世の創作といわれている。あまりに「幸村」の名が有名になりましたため、真田家も幕府も系図や編纂物に「信繁」ではなく「幸村」を実名として採用するようになった。

幸村は上杉家との同盟のため、19歳の時に上杉家に人質として送られた。この時に上杉景勝や直江兼続との親交があったといわれている。

人物ブックマークとは歴史上の人物を紹介し、一緒に関連本を紹介するコーナーです。

しかし、その年に豊臣家との同盟が成立したため、豊臣家の人質となる。豊臣家の家臣として小田原攻めで戦功を上げ、朝鮮出兵では肥前名護屋まで出陣した。

関ヶ原の戦いでは父昌幸と共に西軍に加わり、信濃上田城で、中山道を進軍する徳川秀忠率いる別働隊をわずかな兵力で迎え撃ち、足止めした。しかし、西軍は敗北してしまった。戦後、東軍に属した兄信之の助命嘆願により父と高野山九度山に蟄居した。

大坂の陣が起きると豊臣秀頼に加担し、大坂城に入る。冬の陣では外堀に「真田丸」という出城を築き、幕府軍

を苦しめる。夏の陣で家康の本陣を三度蹂躪し、あと一步まで追い詰めたが家康を討つことは叶わなかった。激戦の末、幸村は力尽き49年の生涯を閉じた。

大坂夏の陣で敗戦と分かっていながらも、豊臣家への信義を貫き最後の最後まで諦めずに戦い抜いた幸村こそ漢の中の漢といえよう。大河ドラマ「天地人」では幸村と直江兼続との師弟関係と、幸村の大坂の陣での活躍に注目していこうと思う。



(真田幸村関連本)

「真田太平記」 戦国時代末期の真田家の興亡を軸に、真田家を陰で支える草のもの(忍者)たちの活躍を交えて描かれた池波正太郎の長編大河小説。読みごたえ十分です。

「真田三代」 幸隆、昌幸、そして信之、幸村兄弟の真田家三代の生涯を豊富なイラストや写真、図で紹介している。三代の生き様を通して真田家がいかに名を馳せていったかが分かる1冊。

スタッフのセレクション！ 第5回

このコーナーでは、篠崎図書館で働くスタッフが、ほとんど個人的趣味で選んだオススメ本やCDを毎号紹介してまいります。今号は、スタッフのKさんが選んだ1冊です。

北村薰『スキップ』

主人公真理子は昭和40年代に生きる17才の高校生。しかし、ある日学校から戻りレコードを聴きながら目を閉じて、そこから目覚めた時には25年後、42才の“わたし”になっていた…。その間の記憶は無い。国語の教師になったことも、結婚をしたことも、子どももができたことも、そして自分の体も心も徐々に年齢を重ねた過程も知らぬままに突然その環境に置かれてしまう。17才の真理子がそのままなのは、心だけ。

でも、その若い“心”がこの物語の中でとても重要な意味を持つ。どうしようもないほどの孤独、不安、そして戸惑いを抱きながらも真理子は自分（の心）と同じ年齢の娘、そして共に年を重ねて来た（ということになっている見ず知らずの）夫と共に“今”的自分がやるべきことをまっすぐに見つめ、ひとつひとつ最善を尽くそうとする。教師として生徒と向き合い、授業をし、試験問題を作る。同僚との付き合いもある。受け入れられない出来事に悩み、分からぬ事に戸惑うけれど、なんとかやっていく。そしてそのことが、真理子にとっては未来の人たちである家族や生徒たちの心に新たな風を吹き込む。生き生きとした新鮮な気持ちで取り組む授業、慎重な言葉のやりとり、毎日の生活の中で少しずつすりきれてしまった相手への心配りや羞じらいの気持ちなど。それは、42才の心を持つ真理子も確かに持っていたもの“今”的尊さ、時の流れ、そして“心”的行方を感じること。

駅のホームや電車の中で、小さな文庫本の活字を目で追いながら、ふわりふわりと浮かんでくるものがあった。ずっしりした想いではなくて、プリンの素のどこか粉っぽくて淡い甘さや、ガリ版のインクの匂い、いつもなんとなく蹠してしまうことや、気持ちが立ち止まってしまうときの、表現するほどでないけれど少し胸のつまるような感覚、古くからの友人とのちょっとしたやりとり、懐かしい景色。

物語の中の小さなやりとりひとつひとつに、それぞれの登場人物、その人だけが持つ心の有り様が描かれる。

人にとって、見た目や職業、特技や人からの評価、その他諸々の外枠はもちろん大切ではあるけれど、でもそれがすべてでは無い。それらが失われたとしても、残るもののがきっとある。真理子の家族がこの出来事で感じ、そこから自分の本来の心を見つけたように、私自身の、そして共に過ごす大切な人たちの心の核をずっと感じてゆけたら素敵だと思う。そして、ふと見失ってしまったときにも、「胸の中の箱」にそれを捨てずにもっていれば良いのだ。「そうしたら、もしかして機会があった時、」「それを見せてあげられる」のだから。

直木賞候補にもなり、舞台化もされた。とても話題になった小説なので読んだ事のある方も多いかもしれない。でも、出版から10年以上が経っている。今の自分でもう一度この物語の真理子を感じてみてはいかがでしょうか。

*文中の「」内の言葉は、小説本文から引用しました

DVDへの誘い VOL.2

12人の怒れる男(1957年アメリカ)

監督：シドニー・ルメット
出演：ヘンリー・フォンダ、リー・J・コップ他

17歳の少年が犯した殺人。だれが見ても有罪である事件を十二人の陪審員が審議する。審判には全員の一致が必要だが、たった一人の陪審員だけが無罪を主張する。暑く狭い密室の中で交わされる「私情」「偏見」「先入観」、かくして少年の人生は男たちの評決に委ねられるのであった。

密室というワシントン・ショーン、冒頭の長回しによるキャラクター紹介等の演出も面白いが、「アメリカの良心」ことヘンリー・フォンダが一人、また一人と審判をひるがえさせる様は痛快である。5月から日本でも導入される裁判員制度に先がけ、この機会に裁判員制度の真意をよく考えてみるというのはいかがでしょうか？

江戸川まいにんぐ 発掘 第5回 ミズクラゲ

葛西臨海水族園は区で抜群のビジターニュースを誇るレジャー施設です。テーマごとに分けられた水槽がたくさんあります。カラフルな珊瑚に寄り添う暖海の妖精たち、妖しのきらめきを見る回遊魚たち、暗いフロアを染める幻想的な光一。そこに大人も子どもも引き寄せ、とくにカップルをぽわ～～んと浸りきらせてしまうマジックがあります。

で、水族園でのおすすめはミズクラゲ。本館1階の実験水槽で飼われています。大海原にいるときに見せる波にも潮にもさからわないライフスタイルを水槽の中でも貫いていて、水流のなすがままにゆらりゆらりと漂うその潔いまでのユルさ加減は一見の価値あり。

さて、ミズクラゲの一生は変幻自在。卵は孕むは、我が

身を次々にちぎってクローンをばらまくは、そのうえ土壇場で瞬殺兵器「刺胞」を繰り出すは、とことん脱力しながら意外にポジティブだったりします。

実験水槽に張り付いてエフィラ、ストロビラなどの幼生段階から大人になるまでの一歩始終を観察したら、表のテラスに出て一休み。そこからビール片手に一望する東京湾は、さっき見たばかりの生きているカオスたちの搖りかごなのです。

ちなみに、クラゲをぼとと眺めているのもいいですが、そこでアイディアがばっしと閃くとノーベル賞を取れることを、昨年クラゲが鮮やかに教えてくれました。

